当院における不規則抗体スクリーニングの実際

◎寒川 裕未[1)]、北爪 玲子[1)]、沢田 郁美[1)]、持留 汐莉[1)]、山本 章史[1)]
地方独立行政法人大阪府立病院機構 大阪国際がんセンター[1)]

【はじめに】
赤血球型検査ガイドラインでは、酵素法は非特異反応を起こしやすく、臨床的意義のある一部の抗体を検出できないなどの理由から不規則抗体スクリーニングで実施する意義は低いと明記されている。一方、抗 Rh や抗 Lewis など一部の抗体では反応が増強されることも報告されている。当院の不規則抗体スクリーニング検査は、血液型分析装置を用いて酵素法と LISS-IAT の 2 種類を行っている。今回、不規則抗体スクリーニングにおいて反応が認められたものを集計し、酵素法の有用性を検討した。
【方法】
2022 年 11 月から 2023 年 10 月までの 1 年間において、血液型分析装置で陰性とならなかった不規則抗体スクリーニング検体の内訳を調べた。精査の結果、「陰性」「陽性」「検体量不足のため再検査を依頼したが未検査のもの」「その他」に分類し、陰性については内訳も調べた。
【結果】
集計の結果、「陰性」となるものが全体の半数以上を占めた。再検査を行うことで陰性になるものや吸引エラーなどの機器トラブルによるものもかなりの割合を占めたが、酵素法のみ陽性で精査の結果陰性になるものは、少ない月で 28.6%、多い月では 58.5%となった。総数 7925 件のうち、以前は IAT 法で陽性だった不規則抗体が酵素法のみ陽性に減弱したものが 2 件、輸血後に酵素法が先行して陽性になったものが 1 件、酵素法陽性で LISS-IAT 陰性となった検体で、用手法の PEG-IAT で陽性となったものが 2 件あった。
【まとめ】
当院の不規則抗体スクリーニングでは、血液型分析装置で陰性とされなかった検体の半数以上は精査の結果陰性となった。この結果からは、不規則抗体スクリーニングで酵素法を用いる意義は低いと考える。しかし、頻回輸血を必要とする患者が多く、免疫抑制剤の使用も多い当院においては、酵素法にて産生初期の抗体を検出することの有用性を考慮し、酵素法の意義について慎重に検討していく必要があると考える。
連絡先 06-6945-1181 (内線：5219)